今年度のグッドデザイン賞受賞

東京農大のみどりくんプロジェクト

2007年に後藤教授ら開発

東京農業大学で開発された生ごみリサイクルシステム（みどりくんプロジェクト）が、2019年度グッドデザイン賞を受賞した。

生ごみ肥料「みどりくん」は2007年に当時の後藤逸男教授が中心となって開発したもので、東京農大内の実験プラントで稼働している。現在は東京農大の生ごみ肥料化技術と、キヤノン電子㈱の脱臭・自動袋詰め機能付の業務用生ごみ処理機を貴重な農地が残る東京都世田谷区で稼働させており、世田谷区内の学校給食から出る生ごみを直接、あるいはキヤノン電子の生ごみ乾燥機で乾燥した生ごみを集めて、わずか数時間で製造して有機質肥料が作られている。

昨年10月には新規公定規格「食品残さ加工肥料」に設定された。

その肥料は周辺の農家が使用して野菜を生産し、庭先販売や学校給食の食材に使うといったように、都会の中だけで生ごみリサイクルを完結することができる。

昨年の「食品残さ加工肥料」決定に次ぐ快挙

その「都会完結型生ごみリサイクルシステム（みどりくん）プロジェクト」がこのたび2019年度のグッドデザイン賞を受賞した。受賞したのは東京農業大学（プロジューサー・ディレクター＝後藤逸男名誉教授）と、キヤノン電子㈱（同＝若井良之専務執行役員・環境機器事業部長）

グッドデザイン賞は日用品や家電製品などの工業製品や建築物をはじめ、各種サービス、あるいは地域づくりなどのコミュニケーション活動など、あらゆるものがその対象として応募され、色彩や形状などの目に見える部分のデザインのみならず、プロセス、思想、意義などの目には見えにくい要素を含めて賞が決定されている。

今回生ごみ肥料「みどりくん」が評価されたデザインポイントとしては、①東京農業大学とキヤノン電子による都会でもできる迅速で悪臭が出ない生ごみ肥料化技術の開発、②大学・企業・小中学校・JA・地域住民など地域が一帯となった都会完結型生ごみリサイクル活動の実践、③小中学校での環境・食育教育の推進・都市農地の存続、といったことが評価され、東京都世田谷区で始めたこの活動を今後は全国への拡大を図りたいといっている。